

ゼバステイアン・ブラント 『阿呆船』序詩に関する語学的考察(2)

大 島 浩 英

要 旨

1494年、バーゼルでSebastian Brantによる風刺詩集Das Narrenschiff (『阿呆船』)が出版された。この詩集は当時の乱れた社会道徳をローマ・カトリックの立場から批判し戒めた説教集のようなもので、後には低地ドイツ語、ラテン語、フランス語、オランダ語、英語などにも翻訳されヨーロッパ各地に影響を及ぼした書物であるが、言語的には中世高地ドイツ語から新高地ドイツ語へ移行する過渡期にある初期新高地ドイツ語で書かれたものである。本稿ではこのテキストを資料として、15世紀末のドイツ語の言語状況を現代語と比較しながら語学的な考察を行った。

音韻面では、原文でのouchが現代語ではauchとなるSenkung (「下げ」)、原文でのwißheit、sydtなどの長母音が現代語ではそれぞれWeisheit、seitのように二重母音へと変化する現象、ウムラウト表記ではüとüの原文テキスト内での競合、saget→seitのようなKontraktion (縮約)、完了相動詞と過去分詞の接頭辞ge-、あるいは再帰代名詞sich (3格)の人称代名詞による代用、dasの多機能性、語義の違い、韻文における語順などに関して、現代ドイツ語との類似点、相違点を今回扱ったテキストの範囲内で明らかにした。

キーワード：初期新高ドイツ語、ゼバステイアン・ブラント、阿呆船、風刺文学、ドイツ語学

はじめに

Sebastian Brantによって1494年にバーゼルで発行された風刺詩集 Das Narrenschiff (『阿呆船』)は、二行一組で脚韻を踏む形式 (Paarreim) で書かれた韻文である。そし

てその冒頭の序詩では、当時のヨーロッパ社会のあちらこちらに見受けられた愚かな行為をする者 (Narr) たちを満載し、阿呆の国へ向かう (gen Narragonien) 船を造る、というこの詩集全体の枠組が語られる。

聖書のありがたい教えがあるにもかかわらず、愚かな振る舞いをするものが後を絶たない世の中を嘆きながら、この書物の中でさまざまな阿呆の姿を描いて戒めとしたい Brantの意図が詩行の中で語られていく。前回の拙稿ではこの序詩の1行目から43行目 „Aber wer ye wil witzig syn (「それでも賢者でいたがる者は」)“、44行目 „Der ist fatuus der gfatter myn (「大したばか者、わが相棒」)“ までを扱ったため、本稿の45行目はこの44行目と関連して語られる。なお、原文には5行ごとに行数を付し、和訳に際しては韻律に関係なくできるだけ逐語訳を行った。また、本稿では全136行のうち89行目までの詩行を考察の対象にした。

使用テキスト

原文：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Studienausgabe. Hg. von Joachim Knappe. Stuttgart 2005. (Reclams Universal-Bibliothek Nr. 18333) S.109 f.

現代語訳：

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Übtg. von H. A. Junghans. Stuttgart 1964. Bibliographisch ergänzte Ausgabe 1992. (Universal-Bibliothek Nr. 899) S.8 ff.

上記および次の各テキストに付された注釈を適宜参考にした。

Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Felix Bobertag. Berlin u. Stuttgart 1889.

(Deutsche National-Litteratur. hg. von Joseph Kürschner, Bd. 16) S.7 f.

Zarncke, Friedrich: Sebastian Brants Narrenschiff. Leipzig 1854. (Hildesheim 1961) S.298 f.

略語：mhd. 中(世)高(地)ドイツ語、frnhd. 初期新高(地)ドイツ語、nhd. 新高(地)ドイツ語、lat. ラテン語

I

原文

現代語訳

Der dūt mir ouch dar an gewalt 45

Der sich zu mir recht übel stellt,

Wan̄ er dyß büchlin nit behalt

Wenn er dies Büchlein nicht behält.

その阿呆は私に不当な振る舞いするかもしれぬ

こんな本でも手元に置いていなければ

冒頭の指示代名詞*der*は44行目の*fatuus* (*ein Narr, Thor*「阿呆」)を受けており、自分を賢者と思っているような阿呆は、その愚かさを戒めるこんな本でも読まなければ危険な存在にもなり得るという警告がここでは読み取れるように思われる。また*mhd. gewalt*には「暴力(武力)、不当な力」の意味があるが、Zarnckeでは*thut mir unrecht*（「不当に評価する、悪口を言う」）という説明も加えられている。

さてこのテキストでは、現代語の*auch*が*ouch*という形で現れており、*ou*→*au*へと舌の位置が下がる*Senkung*（「下げ」）という現象が起こる前の例が見られ、原文と現代語とで母音の変化が認められる。¹⁾次に、現代語*tun*（「する、行う」）の人称変換形*tut*がここでは¹⁾*düt*と表記されており、母音の前に*d*が現れている。初期新高ドイツ語（*Frnhd.*）の時期ではこの*d*と*t*が競合しているが、新高ドイツ語（*Nhd.*）期へと時代が下ると*t*が優勢となり現代では*t*が定着している。しかしこれとは逆に、*Teutsch*→*Deutsch*のように*t*→*d*へと変化し、定着したものもある。また46行目の*wann*は*wanne*の省略形と考えられ、*dyß*では母音の*y*が現代語では*ie*と長音化した形で表される。

ウムラウト表記については²⁾*büchlin*のように²⁾*ü*と²⁾*ü*がこのテキスト内で競合しており、また²⁾*-lin*の*i*は現代語では²⁾*-lein*と二重母音化する。*behalt*は現代語訳では²⁾*behält*とウムラウトしているが、*Mhd.*では人称変化でウムラウトしない形もあり、原文テキストにウムラウトがないのはその影響と思われる。各行末の*gewalt*、*behalt*で脚韻を踏んでいる。

Hie ist an narren kein gebrust

Hier wird an Narren nicht gespart,

Ein yeder findt das in gelust

Ein jeder findet seine Art,

ここ（この書物）では阿呆に不足はない

阿呆を喜ばせるものが何かを誰もがわかる

48行目では不定冠詞が現代語と同様*ein*という表記で文頭に現れているが、同じテキスト内で²⁾*eyn*という形態も見られ、²⁾*i*と²⁾*y*が競合している。また文中の²⁾*das*はこの場合不定関係代名詞（*nhd. was*）の機能を担っており、*Frnhd.*における²⁾*das*の多機能性がうかがえる。

さて、関係文内の動詞²⁾*gelust*は²⁾*in*（=*nhd. ihn*「彼を」）を4格目的語にとって、*mhd. gelusten*（「楽しませる（*nhd. belustigen*）」）に対応しているが、現代語では雅語として²⁾*es gelüestet jn. nach ...*という非人称の用法となり、語法に変化が見られる。この語について²⁾*Bobertag*、²⁾*Knape*はそれぞれ²⁾*verlangt*、²⁾*begehrt*（「欲しがる」）といった語を対応させている。この²⁾*gelust*と前行の²⁾*gebrust*で脚韻を踏んでいる。

Vnd ouch war zú er sy geboren		Und auch, wozu er sei geboren,
Vnd war vmb so vil sindt der doren /	50	Warum so viele sind der Toren;
阿呆が何のために生まれたかも (わかる)		
なんでそんなに阿呆が多いのか		

ここではwar zú→nhd. wozu、war vmb→nhd. warumのように、現代語では一語となっている語がそれぞれの要素に分けて表記されており、各語の独立性が保たれている。また、sy→nhd. seiでは二重母音化が起こる以前の長母音の形が残っている。

次に、50行目のvil (=nhd. viel) は1格の主語と考えられ、これに複数のder doren (=nhd. Toren³⁾) がかかる部分の2格の用法が見られる。この場合のvilは複数扱いで、これに対応する動詞sindt及び、49行目のsyが音韻の関係から副文内でも後置されていない。現代語訳では、viele「多くの人々」が主語、der Torenは述語の2格で、「多くの人々はなぜ阿呆であるのか」という表現に訳されている。geboren、dorenで脚韻を踏む。

was ere vnd freyd die wißheit hat /		Welch hohes Ansehn Weisheit fand,
Wie sörglich sy der narren stat /		Wie sorgenvoll der Narren Stand.
知恵にはどんな名誉と喜びがあるか		
阿呆の立場はいかに危ないか		

ここでのwasには、2格とともに用いられたmhd. wazと同様に「どんな (was für)」の意味が認められる。freyd (=nhd. Freude) ではeyからeuへという二重母音の変化が、そしてwißheitではnhd. Weisheitへと長母音から二重母音への音韻上の変化が現代語との間に見られる。また、der narren statでは複数2格の付加語der narrenがまだ名詞に前置されている段階にある。ここでは、hat、statで脚韻を踏んでいる。

Hie findt man der welt gantzen louff		Hier findet man der Welten Lauf,
Diß büchlin wurt güt zú dem kouff		Drum ist dies Büchlein gut zum Kauf.
ここでは世間の移り変わりがつぶさにわかる		
この本はよく売れるだろう		

ここでも前行と同様、2格付加語のder weltがgantzen louffの前に置かれている。音韻については、それぞれ行末で脚韻を踏んでいるlouff、kouffが現代語ではそれぞれ Lauf、Kaufとなるため、ここでも舌の位置が下がるSenkung (「下げ」) 以前の例が見られる。またいずれの語も語末がffと重ね書きされているが、音声上の根拠がない単なる

装飾的なこの現象は初期新高ドイツ語の特徴ともなっている。なお54行目の動詞wurtはこの場合、円唇音にならなかったnhd. wirdか、あるいはmhd. würde（接続法過去）に対応すると思われ、後者についてはウムラウト表記と語末音eが脱落したものと考えられる。wurtに関しては、この序詩全体でwürt（7、78行目）、wurt（33、54行目）、wirt（80行目）、würd（105行目）といった形で現れており、これらの形態について意味的に明確な使い分けが行われていたかどうかは疑問である。

Zü schympff vnd ernst vnd allem spil	55	Zu Scherz und Ernst und allem Spiel
Findt man hie narren wie man wil /		Trifft man hier Narren, wie man will,
冗談でもまじめでも、なんでもござれ		
望み通りの阿呆がここで見つかる		

schympff (=nhd. Schimpf) は現代語においては「侮辱」の意味に限定して用いられるが、mhd. では「侮辱」の他に、「気晴らし」、「楽しみ」、「冗談」、「嘲笑」といった意味もあるため、この個所では「冗談」の意味で用いられているものと思われる。また、行末のspilに対してZarnckeは現代語のSpiel（「遊び、戯れ」）とは違ってzu allem möglichen（「あらゆる可能なもの」）という注釈を加えており、Grimmにもdie gewöhnliche thätigkeit [Bd. 16, Sp. 2285]（「通常の行為」）という説明があるため、この場合のspilは「遊び」という具体的な意味よりもむしろ一般的な行為全般を指しているものと考えられる。このspilとwilとで脚韻を踏む。

II

Ein wiser findt das in erfreydt	Ein Weiser sieht, was ihm behagt,
Ein narr gern von syn brüdern seyt /	Ein Narr gern von den Brüdern sagt.
賢者はお気に入りのものを見つけ	
阿呆は好んで自分の仲間たちのことを話し	

57行目のwiser、58行目のsynでもそれぞれ現代語のWeiser、seinenのように長母音が二重母音化する前の形態が見られる。また、dasは48行目と同様に不定関係代名詞wasとして用いられている。erfreydtは51行目のfreyd (=mhd. vröude=nhd. Freude) から派生させた動詞erfreydenが人称変化した形態と考えられ、この動詞はmhd. erfrouwen、nhd. erfreuenに対応するものであろう。

さて、「言う」を意味する行末のseyt (=mhd. seit) は、mhd. のsagen、あるいは中部

にしか使われず3格には人称代名詞が使用されていたがFrnhd.ではこのsichが3格にも転用されるようになり、両者が併存している。

Het ich in mit sym ⁶⁾ namen gnent Er sprech / ich het in nit erkent / たとえ私が阿呆をその名前と呼んだとしても 誰のことだかわからぬと阿呆は言う (だろう)	Hätt ich mit Namen ihn genannt, Sprach er, ich hätt ihn nicht erkannt.
---	---

文頭のhetはwennの省略により倒置されたものと思われ、そしてこの完了の助動詞hetは接続法過去のheteが語末音消失したものと考えられる。またそれに続く主文の接続法現在、あるいは接続法過去の定動詞sprech (=mhd. spræche) が正置されていることから、この文は「たとえ～であっても」という仮定的認容の意味を持つものと思われる。またsprechの内容部分では主語がichとなり、直接話法で表現されている。

各行末の過去分詞gnent、erkentは現代語のようにgenannt、erkanntと母音が変化していないため規則変化に近い過去分詞形となっており、脚韻を踏んでいる。

Doch hoff jch das die wisen all Werdent harjnn han wolgefalle しかし賢者の皆さまに望みたい これに賛同していただき	65 Doch hoff ich, daß die Weisen alle Drin finden werden, was gefalle,
---	--

66行目の未来の助動詞werdentでは三人称複数現在の語尾にtが添えられているが、これは現代語ではsindなどにわずかに残る程度で、原則的に現代語ではこの語尾のtは付加されない。また助動詞werdentとともに枠構造を作る本動詞hanがこの副文内では音韻関係もあり文末に後置されておらず、韻文における枠構造は未整備であると言える。また、Nhd. ではWohlgefallen haben (「～が気に入る」) は前置詞anと組み合わせて用いられるが、このテキストではharjnnのように前置詞inが使われている。allとwolgefalleで脚韻を踏む。

Vnd sprechen vß jr wissenheit Das jch hab recht vnd wor geseit そして皆さまの良識から言って下さることを 私の言ったことは正に真実であったと	Und sagen dann mit Wissenheit, Daß ich gab recht und gut Bescheid.
--	---

vß jr wissenheitで、vß jrはNhd. ではaus ihrerとなり、時代が下ることでvßが二重母音化され、またjrにも格変化語尾が付加されるが、原文ではまだMhd. の形態が残されている。次のwissenheitについてはBobertagはKenntnis、Wissen（「知識、学識」）という注釈を加えているが、Zarnckeではlat. conscientia（「自覚、確信、良心」）といった説明をこのwissenheitに対して行っており、単なる「知識」とは異なる解釈をしている。完了の助動詞habはここでも韻律のため副文内で後置されておらず、またhabに対応する過去分詞geseitは前述のようにmhd. sagenの縮約形である。このgeseitとwissenheitで脚韻を踏んでいる。

III

Sydt jch sollch kuntschafft von jn weiß		Und da ich das von ihnen weiß,
So geb jch vmb narren eyn schweyß	70	Geb ich um Narren einen Schweiß;

私が賢者からのそのようなお墨付きを心得ているので
それなら私は阿呆のためになど、何の気遣いもしない

69行目のsydtはmhd. sit (=nhd. seit)（「～のゆえに、だから」）に対応する従属接続詞で、まだ二重母音化していない形で用いられている。この副文内の定動詞weißは文末に後置されてここでは枠構造が形成されており、Nhd. に近づいていることがわかる。また、kuntschafft (=nhd. Kundschaft「情報、報告」)という語に対してZarnckeは、ein vor gericht abgelegtes zeugnis, eine zeugenaussage（「法廷で行われる証言、証人の証言」）という説明を加えており、この場合は、プラントの考えを正しいと認める賢者たちの証言、といった意味で用いられている。

さて70行目のeyn schweyß（「汗」）については、Knape、Bobertagともにgar nichts、nichtsという否定の語で説明を加え、Grimmドイツ語辞典でもzur bezeichnung von etwas nichtigem werthlosem（「無価値なものの表示」）[Bd. 15, Sp. 2460]と記述されているため、70行目の文は「何も与えない→何の配慮もしない」という否定文と考えられる。これに対してZarnckeは、否定的意味を持つswitzにさらに否定詞nichtを加えて強調した „Ich gäbe vmb alle Sachsen nicht ein switz.（下線は筆者）“ という例文を挙げ、この表現の解説を行っている。weiß、schweyßで脚韻を踏む。

Sie müssen hören worheit all

Ob es jnn joch nit wol gefall⁷⁾

彼らはみんな真実を聞かねばならぬ

たとえそれが彼らには気に入らないものであっても

Sie müssen hören Wahrheit alle,

Ob ihnen es auch nicht gefalle.

worheit (「真実」) についてはmhd. warheit、nhd. Wahrheitとなり、Frnhd. での母音だけがoとなっている。このテキストではworlich (=mhd. wærliche, nhd. wahrlich)、wor (=mhd. war, nhd. wahr) など類似した例が見られるため、aがoに変わる円唇化(Rundung)の作用が影響しているのかも知れない。また72行目のwolは文頭のobと組み合わせる現代語の従属接続詞obwohlとして機能しており、文末に後置された接続法現在の定動詞gefälltとともに「たとえ～であっても」という認容の意味が表現されている。ここではall、gefälltで脚韻を踏む。

Wie wol Terencius spricht / das

Wer worheit sag / verdient haß

テレンティウスはそう言うが⁸⁾

真実を言うものは憎しみを受ける、と

Wiewohl Terentius saget, daß

Wer Wahrheit ausspricht, erntet Haß;

ここで分割して書かれているwie wolも前述の例のように、現代語ではwiewohl (=obwohl) と一語で書かれるものである。また、74行目では現代語と同じ不定関係代名詞werが使われており、それに続く定動詞sagetは直説法ならsagetとなるが、ここでは接続法現在の形式で表現されている。またverdient「受けるにふさわしい」に対しては、erntet (Junghans)、erwirbt (Bobertag) など「得る」を意味する訳語が付けられている。das、haßで脚韻を踏む。

Ouch wer sich langzyt schnützen düt

Der würfft ettwan von jm das blüt

また、長々と鼻をかむ者も

自ら鼻血を出すだろう⁹⁾

75

Und wer sich lange schneuzen tut,

Der wirft zuletzt von sich das Blut;

75行目の再帰代名詞sichは4格で用いられたものでsich schnützenで「鼻をかむ」という意味を表現するが、76行目のvon jmでは現代語訳のようにsichはまだ用いられず、人称代名詞の3格jmが使われている。またここにはschnützen düt (nhd. schneuzen tut) という不定詞+tunの表現が見られる。これはFrnhd. 時代の特徴で押韻のための表現と

も言われているが、現代語では本動詞の強調という機能で残っていると考えられる。

音韻面では、schnützen→nhd. schnäuzenで、短母音の ü が äu (eu) へと二重母音化し、またwürfft→nhd. wirftでは ü → i への非円唇化 (Entrundung) ¹¹⁾が見られる。düt、blütで脚韻を踏む。

Und wan̄n man Coleram anreygt	Und wenn man coleram anregt,
So würt die gall gar offt beweygt	So wird die Galle oft bewegt.

怒りを刺激すれば
怒りがちよくちよく突き動かされる (すぐに怒り出す)

前述のようにwan̄nはmhd. wanneに対応するものと思われ、「条件」を表す接続詞はFrnhd. ではwennの形で現れることもある。77行目のColeramはZarnckeによればラテン語Cholera「立腹」に由来し、Nhd. のGalle「怒り」に対応する語と説明されている。また、各行末で脚韻を踏んでいるanreygt、beweygtはそれぞれ現代語訳ではanregt、bewegtとなり、ここではFrnhd. の二重母音eyからNhd. の長母音 e への変化が見られる。BobertagではGalligkeit erregtという説明もあり、基礎動詞regenに対してan-とer-の置き換えが可能である。なお、78行目の接続法過去の形態と思われるwüritに対して、現代語訳では直説法現在のwirdを対応させている。

IV

Dar vmb acht ich nit / ob man schon		Darum beacht ich, was man spricht
Mit worten mich wirt hindergon	80	Mit Worten hinterm Rücken, nicht,

そんなことなど何とも思わぬ
たとえ人が私の背後で陰口をたたき

ここでも現代語ではdarumと一語で書かれる語がFrnhd. ではdar vmbと分割して記述されている。また従属接続詞obはこの場合mhd. ob「たとえ～であろうとも」の意味と思われ、副詞schonとともに認容の表現となっている。

さて80行目のhindergonはKnappeではhinterrücks angehen (「背後から襲う」)、Zarnckeではhinter meinem rücken angreifen (「背後で非難する」) などの注釈があるが、Grimmにはhinter einen gehen [Bd. 10, Sp. 1502] という説明があるように、本文のmichは本来hinter mich gehen (「私の背後へ回り込む」) という方向を表す前置詞hinterの4格目的語であった可能性が高いと考えられ、したがってhinterには動詞前綴りとなっても、

前置詞的性質がまだ残されているように思われる。このhindergonとschonとで脚韻を踏んでいる。

Vnd schelten / vmb myn nutzlich ler		Noch wenn man schmäht die gute Lehr:
Jch hab der selben narren mer		Ich habe solcher Narren mehr,
そして私の有益な教えを非難したとしても		
似たような阿呆はいくらもいる		

scheltenと組み合わされる前置詞としてテキストではvmbが現れているが、現代語でscheltenは主にauf、über、mitといった前置詞とともに用いられるため、語法上の違いがここには見られる。音韻面についてはmynがNhd. ではmeinと二重母音化して用いられ、またlerの語尾では語末音消失によってeが脱落することにより、次行末のmerと押韻している。そしてこのmer (=nhd. mehr) はここでは中性名詞として機能し、これにmerの前に置かれた複数のder selben narren が部分の2格としてかかっているものと思われる。

Den wißheit nit gefallet wol	¹²⁾		Denen Weisheit nicht gefället wohl,
Dyß büchlin ist der selben vol			Von solchen ist dies Büchlein voll.
知恵が全く気に食わぬような阿呆たち			
この本には、そんな輩があふれてる			

83行目文頭のdenは前行のnarren (「阿呆たち」) を受ける複数3格の定関係代名詞であるが、nhd. denenのような語尾が付加されておらず、Mhd. での形態で用いられている。定動詞gefalletについては、直説法3人称単数現在の形式と思われるがaにウムラウトが見られない。Mhd. でもvelletと母音に変化があるため、この場合はウムラウト記号が脱落、あるいは省略されたものと思われる。また、行末のvol (=nhd. voll) の用法については、現代語でもvon～、あるいは2格をともなって用いられている。この場合のvolはgenugや語源的に関係するvielなどと同様に名詞と感じられ、これに実際のものが2格でかかるという表現ではないだろうか。このvolと前行末のwolとで脚韻を踏んでいる。

Doch bitt jch yeden / das er mer	85	Doch bitt ich jeden, daß er mehr
Wil sehen an vernunfft vnd er		Ansehn wolle Vernunfft und Ehr

しかし皆様方にお願ひしたいことがある
むしろ理性と名誉をよく見てほしい

85行目のdas (=mhd. daz) は従属接続詞として用いられているが、現代語でのdassは、Ich sehe *das* : er kommt. に由来すると言われており、¹³⁾したがって接続詞dassと指示代名詞dasとは基本的に同じものであったため形態上の区別が明確ではなかったと考えられる。さて、86行目文末のerはere (=nhd. Ehre) の語尾eが脱落したものだが、51行目にはeが脱落していないereという形で用いられている例もあるため、ここでは前行のmerと押韻するためにeを省略したものと思われる。これにより、merとerで脚韻を踏む。

また86行目のsehen anについて、Zarnckeはanが動詞sehenに属するのか、あるいは後続の4格名詞に属するのかという疑問点を提示している。anが後続の名詞と関係して前置詞句を作るという表現はBrantではよく行われる (keineswegs fremd) こととされているが、Zarnckeはこの場合のanが動詞に属する可能性が高いことを説明している。なおこの部分の現代語訳では、anは分離動詞の前綴りとして扱われている。

Dann̄ mich oder min schwach gedicht	Als mich oder mein schwach Gedicht.
Warlich hab jch on arbeit nicht	Ich hab fürwahr ohn Mühe nicht
So vil narren z̄usamen bracht	So viele Narrn zu Hauf gebracht:

私や、私の拙い詩などよりも
ほんとに苦勞なしには無理だった
たいそう多くの阿呆を集めるのには

文頭のdann̄ (=danne) は85行目のmer (=nhd. mehr) に対応して「～よりも」という比較の意味を表しており、dann, denn, alsがFrnhd. では競合している。¹⁴⁾さて87行目のminはmynという表記で81行目にも現れているが、両者に機能上の使い分けは見られない。またこのテキストではwor, worheit, worlichなどの語にoの母音が用いられてきたが、ここではwarlichという現代語と同じaの母音をもつ形も現れ、異なる語形が同じ意味で併存している。on (=nhd. ohne) については、mhd. ane, anからすでにonへと円唇化した形がここでは現れている。

最後に、行末のbrachtは前行の完了助動詞habに対応する過去分詞だが、現代語と異なり語頭にge-が付加されていない。ge-という接頭辞には元来「行為の完結」を表す機能があったため、現在では動詞の過去分詞形に自動的に添えられるようになっているが、

bringenのようにそれ自身に完了的意味が含まれている動詞ではその過去分詞形にさらに完了を表すgeが付加されることはない。これは古代高地ドイツ語時代でもbringenの過去分詞に対応する語がbrahtあるいはbrunganであり、またMhd. でもbrahtとなることからわかる。nhd. gebrachtのように過去分詞にgeが付加されるようになるのは16世紀後半頃からとも言われており、初期新高ドイツ語時代では過去分詞におけるgeの表記が不安定であったことが想定される。

ここではgedicht、nichtで脚韻を踏んでおり、89行目のbrachtは、今後90行目の文末に現れるnachtと91行目文末のgedachtとの3行で押韻することになる。

注：

- 1) 工藤康弘・藤代幸一著『初期新高ドイツ語』大学書林 1992年、47頁。
- 2) Hans Jacob Christoph von Grimmelshausenの『阿呆物語』(1668)のタイトル: Der Abenteuerliche Simplicissimus Teutschは、現代語ではDer abenteuerliche Simplicissimus Deutschと表記され、TeutschがDeutschへと変更されている。
- 3) frnhd. doren→nhd. Toreen
- 4) Johannes Pauli: Schimpf und Ernst (「冗談とまじめ」)。1522に出版された16世紀最初のシュヴァンク集。
- 5) nymet = mhd. nim(e)t (三人称単数現在)
- 6) sym = nhd. seinem
- 7) jnn = nhd. ihnen。69行目ではjnという形でも現れている。
- 8) Publius Terentius Afer (前195年頃～159年)。古代ローマの喜劇詩人。
- 9) 箴言30章33節
- 10) 工藤康弘・藤代幸一 前掲書、99頁。
- 11) 工藤康弘・藤代幸一 前掲書、44頁。
- 12) mhd. wol: völlig (Lexer) (「完全な」)。
- 13) 下宮忠雄編著『ドイツ語語源小辞典』同学社 1992年、28頁。
- 14) 工藤康弘・藤代幸一 前掲書、106頁。
- 15) Ebert/Reichmann/Solms/Wegera: Frühneuhochdeutsche Grammatik. Tübingen 1993. S.237.

上記以外の参考文献：

- Baufeld, Christa: Kleines frühneuhochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1996.
- Gärtner, Kurt / Steinhoff, Hans-Hugo: Minimalgrammatik zur Arbeit mit mittelhochdeutschen Texten. 2. Aufl. Göppingen 1977.
- Götze, Alfred: Frühneuhochdeutsches Glossar. 7. Aufl. Berlin 1967.
- Lexer, Matthias: Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch. 38. Aufl. Stuttgart 1992.
- Paul, Hermann: Deutsches Wörtetbuch. 10. Aufl. Tübingen 2002.
- Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Heinz-Joachim Fischer. Wiesbaden 2007.
- Sebastian Brant: Das Narrenschiff. Hg. von Manfred Lemmer. 3., erw. Aufl. Tübingen 1986. (Neudrucke deutscher Literaturwerke, N. F., Bd. 5) S.4 f.
- 伊東泰治・馬場勝弥・小栗友一・松浦順子・有川貫太郎編『新訂・中高ドイツ語小辞典』同学社 2001年

- S. プラント著 尾崎盛景訳『阿呆船 (上)』現代思潮社 1968年
古賀充洋編『中高ドイツ語辞典』大学書林 2011年
田中秀央編『羅和辞典 (増補新版)』研究社 1966年
山口四郎著『ドイツ韻律論』三修社 1973年